

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会  
(中南地区) (第3回) 概要

日時：平成29年1月30日(月)

10:00～12:00

場所：ホテルニューキャッスル 3階 麗峰の間

<出席者>

委員

佐々木 健 委員、山内 孝行 委員、柴田 正人 委員、長利 允弘 委員、  
武田 登 委員、木田 専一 委員、金枝 尚明 委員、柿崎 博 委員、  
桑田 純也 委員、須藤 君男 委員、鹿内 久人 委員、新谷 貴城 委員、  
齋藤 治 委員、安藤 智史 委員、荒谷 一昭 委員、神 洋文 委員、  
古山 哲司 委員(進行役)

オブザーバー

奈良 昌孝 県立弘前高等学校長、 三上 聡 県立弘前中央高等学校長、  
三上 隆裕 県立弘前南高等学校長、 飛内 文代 県立岩木高等学校長、  
西館 実 県立柏木農業高等学校長、高橋 和雄 県立弘前工業高等学校長、  
笹 浩一郎 県立弘前実業高等学校長、永川 信子 県立黒石商業高等学校長、  
佐藤 昭雄 県立尾上総合高等学校長、梅村 博之 県立弘前第一養護学校長、  
乗田 朋宏 県立弘前第二養護学校長、泉澤 明德 県立黒石養護学校長

1 開会

2 高等学校教育改革推進室長挨拶

佐藤高等学校教育改革推進室長から、挨拶があった。

3 事務局説明及び意見交換

(1) 資料1-3「1 中南地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み」及び「2(1) 重点校、拠点校について」

事務局から、資料1-3及び資料2について説明した。

委員から、次のような意見があった。

- 重点校、拠点校については、おおむね適当であるという意見があった一方で、委員の意見にもあるように県民の中には誤解や不安を抱く方もいるかもしれないので、事務局にはこのことも踏まえて丁寧な説明を十分行うようお願いしたい。

進行役から、重点校、拠点校についてこの内容で良いか確認したところ、委員からは、特に異論はなかった。

## (2) 資料1-3「2(2)委員の意見に基づく学校配置シミュレーション」

事務局から、資料1-3及び資料2について説明した。

### ①「ア 平成29年度に生徒を募集する全ての高校を配置する場合」について 委員から、次のような意見があった。

○ 小規模校は教員の目が行き届くので、学習環境としては非常に良いかもしれないが、農業高校や工業高校には実習があるので、学級数が少なくなると少人数になると大変だと思う。したがってある程度の人数が必要だろう。

○ 第2回の会議で、黒石高校と黒石商業高校の統合について意見があり、それについて出席委員からは特に異論がなかったと思う。

このように複数の学科を有する学校を新設してでも、基本となる学校規模の標準である4学級以上にすべきと考えている。

### ②「イ 中南地区に農業科、工業科、商業科の拠点校を配置する場合」について 委員から、次のような意見があった。

○ 拠点校は4学級以上となるが、黒石商業高校を単独で配置し4学級以上とするのは難しいと思う。農業科や工業科についても課題があり、単純に拠点校とはできないだろう。拠点校にかかわらず農業科、工業科、商業科の学科に関しては中南地区にも設置する必要がある。

また、商業科の学級編制は、現在1学級当たり40人だが、35人にするということも必要なのではないか。

### ③「ウ 黒石高校と黒石商業高校を統合して新設校を配置する場合」について

進行役から、第1期実施計画期間内の中南地区5学級減のうち、黒石市内の統合校で3学級減としたことについて事務局に対し説明を求めた。

→(事務局) 黒石市内の中学校卒業予定者数は、平成34年には、平成29年と比較して126人減少し212人になるものと見込んでおり、今後も著しい減少が続くものと見込まれている。

また、同市の中学校卒業者の進路状況は、約5割から6割の生徒が黒石市外の高校へ進学している。一方で、弘前市、平川市など近隣市町村等から黒石市内の高校へ進学している生徒もいるが、この生徒数は、黒石市内の中学生が黒石市外の高校へ進学する生徒数とほぼ同数になっている。

したがって、平成34年の黒石市内の中学校卒業予定者数が212人になるとの見込みを勘案し、5学級規模とするものである。

なお、平成21年度から29年度までの第3次実施計画期間において、中南地区は11学級の削減を行ったところである。この間、黒石市内の中学校

卒業者は102人減少しているものの、1学級のみで学級減に留まったため、定員割れを引き起こす学校も生じることとなったところである。第3次実施計画は青森市、弘前市、八戸市の普通高校については6学級以上、その他は4学級以上を望ましい学校規模としてきたため、黒石高校及び黒石商業高校は4学級とし、生徒数の減少に見合う学級減をして来なかった。

このことから、平成30年度以降の状況のみを見ると不均衡に感じられるかもしれないが、黒石市内の中学校卒業生数の状況や第3次実施計画期間内の状況を総合的に勘案したものであるもので御理解いただきたい。

今後ともこのことに関しては丁寧に説明していきたいと考えている。

委員から、次のような意見があった。

- 今回の事務局の説明は、第3次実施計画の状況や中学校卒業予定者数を勘案した上で、定員割れを引き起こさないような学校規模としたとのことだと思う。

- 自分は黒石市内から3学級の減少は過剰ではないかと考えていたが、これまで弘前市等で学級減を進めてきたという経緯を踏まえると、黒石市内から3学級減少することも仕方ないと思う。

先日公表された進路状況調査を見ると、定員割れをしている学校・学科や倍率の高い学校・学科がある。普通科を見ると、弘前高校や弘前南高校だけではなく、弘前中央高校、黒石高校と選択肢があるが、工業科等の専門学科を見るとその学科以外に選択肢がなく、かつ倍率が高い状況になっているところがある。そのような倍率の高い学科については学級増して、定員割れしている学科については学級減するなど、全体的に考慮していければ良いのではないかと。

- なぜ、1学級が40人だったり35人だったりするのか。1学級が30人から40人までと幅があれば良いが、子どもたちは徐々に減少するのに募集人員は40人単位で減少してしまう。それが子どもたちの減少に対応しているのか疑問である。

私の勤務する中学校の生徒の約半数が黒石高校、黒石商業高校を受検している。これらの学校を希望する生徒もいるが、自分の学力等を勘案し、別の学校を希望する生徒もいる。

黒石商業高校の情報デザイン科の倍率は1.00倍を切っているが、学力の状況等を勘案した結果であり、生徒の希望を本当に反映した結果とは一概に言えないのではないかと。

(3) 資料1-3「2(3) その他の意見」及び「3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見」について

事務局から、資料1-3及び資料2について説明した。

①「2(3) その他の意見」について

委員から、次のような意見があった。

- 弘前南高校の廃止についてである。将来の中学校卒業生数の減少について第1回で配布された資料を確認した。現在の高校進学率は100%に近い状況である。現在の高校進学者数は、昭和35、36年の状況と同程度であり、その頃に設置された高校が弘前南高校である。設置された背景と現在の状況を考えると、弘前南高校1校を廃止にしても大丈夫なのではないか。これまではどちらかと言うと、どの学校も学級減するなど痛みを分かち合ってきた。かつて必要性があって設置された学校の役割は終わっているのではないか。併せて私立学校との共存についても考えなければならない。

また、黒石市から弘前南高校に進学する交通費が非常に高い。そのようなことも考えれば、弘前南高校の統合についても選択肢の一つではないか。将来に大きな負担を残さないように決断する時期に来ているとの意見もあったが、時代とともに高校の役割を考える必要があると思う。

進行役から、農業科の集約に関し、弘前実業高校の農業経営科の現状についてオブザーバーである弘前実業高校長に情報提供を求めた。

- 柏木農業高校と同じ農業科なので集約が検討事項になったと思うが、弘前実業高校の農業経営科と柏木農業高校で行っている教育は全く重なっていない。弘前実業高校の農業経営科は同科の中で完結している。個人的には、機能の集約は難しいと思う。農業経営科では、地域のリンゴ販売や農協等と連携した経営に関する学習を中心とした学科であることから、これからも配置についてよろしく願いたい。

委員から、次のような意見があった。

- おそらく黒石高校と黒石商業高校の統合校が新設された場合には、商業教育の大部分を弘前実業高校で担うこととなると思う。そうなるといずれかの学科を減らさなければならないとなった時にはどうするのかということはある程度意識しなければならない。
- 高校教育改革の検討に当たっては、やはり子どもたちの夢を育むことが大切であり、子どもたちのニーズに応えることを考えていかなければならない。生徒数が減少する中であって、どのように学校を配置していけば良いのか。

確かに弘前実業高校は商業科、農業科、家庭科等の学科が集められた学校というイメージを持っているのかもしれないが、地域の子どもたちの希望に込めているのは弘前実業高校である。

例えば、これまでの農業は生産に力を入れてきた。弘前実業高校の農業経営科はどちらかと言えば生産よりも経営方法に重きを置いているので、他校とは違うと思う。しかしながら、現在では五所川原農林高校でも生産だけではなく経営に力を注ぎ、グローバルギャップ等に取り組み、中国等で販売したりしている。このように農業は生産だけではなく、地域の特産物をどのように販売していくのかということに目を向けていかなければならない。弘前実業高校の農業経営科は、学校経営上は必要だと考える。充実した教育をするためには1学級では困難かもしれないが、1学級の地域校の例もあるので取り組んでいけるのではないかと。

いずれにしても子どもたちのニーズに応えるべき学校なのではないかと思う。

- 青森県はリンゴ栽培の歴史がある。そのような背景がある中、弘前実業高校藤崎校舎のりんご科が募集停止になった。自分は、生産や経営等、リンゴに関わる全てを学ぶことのできる学科が弘前市内にあっても良いのではないかと考えている。

観光科または観光コースについては、学科を設置するのは現実的ではないと思うが、これからの地域のことを考えると観光は非常に重要であるので、早いうちから人材を育成できる市内の学校にはせめて観光コースを作ってもらいたい。

少なくとも、職業教育を主とする専門学科については、1学級当たり35人としてもらえないか。

## ②「3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見」について

委員から、次のような意見があった。

- 定時制課程について、働きながら学ぶ生徒は少なくなっていると思うが、課題を抱えた生徒も含めて広く学ぶ機会を提供しているのは尾上総合高校だと思う。夜間部であるⅢ部に通学している生徒は10名いるが、弘前市内からは4名であり、残りは黒石市、平川市内等の近隣の生徒である。在籍生徒数だけでは考えられない部分もあるかと思うので、できるだけ現在の状況を維持してもらいたい。

- 費用対効果が不明なので何とも言えないが、民間との協力によるサテライト教室等も含めて取り組んでいくべきではないかと思う。

- 尾上総合高校のⅢ部について、弘前市内からは非常に通学しづらいということからサテライト教室ということを考えてが、現実的には運営上かなり厳しいのではないかと改めて思った。それよりも弘前市内に工業科ではない学科の夜間定時制課程を設置した方が良いのではないかと思う。

#### (4) その他

委員から、次のような意見があった。

- 弘前市教育委員会としてはウの案で進めてもらいたい。加えて、定時制課程の件や観光コースの設置を是非お願いしたい。
- 自分は途中から地区意見交換会に参加したが、黒石高校と黒石商業高校の統合についての意見を求められたりした。黒石市議会でも9人の議員から質問があった。現在黒石市では小中学校の適正配置の真っ只中にあり教育に対する関心が高まっている。9人中2人から、地区意見交換会での発言内容や今後の方向性等詳細な質問があった。このように市民や市議会も関心が高まっているので、県民、市民にもっとよく分かるように周知してもらいたい。  
例えば、本日の地区意見交換会もホームページには傍聴できるが旨掲載されているかもしれないが、ほとんどの市民はよく分かっていない。  
特に黒石市だけが統合の対象になるのであれば、例えば、中学校卒業生数が減っていることや黒石市内の中学校卒業生の5割から6割が黒石市外に進学していることなど、積極的に説明会を設けて黒石市民に直接説明してもらいたいと思っている。
- 重点校、拠点校の候補校については妥当だと思う。普通科の削減を最小限にすることは子どもたちの進路状況を踏まえると必要だと思う。子どもたちの進路希望の実態に合わせた高校教育改革を実施してもらいたい。
- 第1次産業に関わる高校の充実がより必要だと思う。農業科に関しては、県南地方には、名久井農業高校と三本木農業高校があり、津軽地方には、柏木農業高校と五所川原農林高校があるが、更に農業教育の充実を図っていかねばならないと感じている。これが本県の根本だと思う。例えば、農業高校からAO入試等で大学に進学できるよう活性化する必要がある。
- 子どもたちの多様化した希望にどう応えるかを第一に考えてほしい。それぞれの子どもたちの実態を把握しながら、どのようにそのニーズに伝えていくかを考える必要がある。だからこそ学校の特色をもっと明確にし、生徒を募集すべきだと思う。統廃合については、中南地区は他地区とは異なり地理的に恵まれているので、どこでも通学できる環境である。いずれにしても子どもたちのニーズに合った学校を考えていただきたい。

弘前実業高校については、時代の要請に応えるため、商業科、農業科、家庭科等が学科の特色を生かして、商品開発から販売までを考え実践する起業家教育を学校の経営方針としていることが中学生に受け入れられていることに配慮してほしい。例えば、清水森ナンバにしても各学科が連携して1つの商品を作り上げている。そのような中で学科がなくなれば、弘前実業高校の魅力が半減することにつながるということを考えてもらいたい。

- この高校教育改革が子どもたちのためであるということは明確である。その上で2点お願いしたい。

一つは、近年増えている発達障害のある生徒の能力を引き出す取組をお願いしたい。

もう一つは、不登校の生徒が安心できる場所として、定時制課程の学校の充実をお願いしたい。

- 大学進学を念頭に置くのであれば、弘前高校と弘前中央高校の学級数を増やすとともに、教員の配置を充実すべきである。併せて教員の質を高めるべきである。弘前南高校が設置される以前に、普通科を目指す男子生徒には公立だと弘前高校しかなかった。現在、公立では弘前高校、弘前南高校、弘前中央高校の3校があり、私立高校では、東奥義塾高校、弘前学院聖愛高校、弘前東高校の3校がある。また、大学進学を目指す生徒の中には公立を受検することなく私立高校を第1志望とする生徒も増加している。このことは、公立よりも私立高校の進学に力を入れたコース等に進学した方が、希望する大学に進学できるという考えによるものである。中学校卒業時において、同等の学力のある生徒が県立高校または私立高校へ進学した場合、私立高校の方が志望大学へ進学する率が高いと思う。

いずれにしても、公私ともに男女共学が増えてきており、弘前市内では中学生の進路の選択肢は満たされてきている。一方、黒石高校は男子生徒が少なく、黒石市内の男子生徒は弘前市内の高校に進学しているが、弘前市内の高校が点在していることから通学に対する時間や費用の負担は非常に大きい。重点校を中心に弘前駅から通えるような配置が望まれる。弘前南高校は通学が不便なので弘前高校、弘前中央高校が中心となれば良いと思う。結論としては弘前南高校と黒石商業高校の役割は終わったのではないかと思う。

- 黒石高校と黒石商業高校の統合には賛成である。統合してみればいろいろ課題もあると思うので、その課題を踏まえながら、この統合をモデルケースとして検討を重ねてもらいたい。第1期実施計画だけを見ると黒石市内の高校の学級減に偏っているように見えるので丁寧に説明してもらいたい。

また、生徒のニーズや全体のバランスを考えて学校規模・配置を検討してもらいたい。

○ 自分も黒石高校と黒石商業高校の統合には賛成である。自分は黒石商業高校出身なのでなくなるのは寂しいが、通学等も含めて考えると黒石高校の場所に統合した方が良いと思っている。

○ 一番懸念しているところであるが、重点校と拠点校が特別な学校であると誤解を与えないように慎重に説明してもらいたい。

○ 今後全ての学校を残すことで、選択肢を確保することや通学の利便性に配慮することにもなるかもしれないが、どうしても小規模化してしまう。集団の中で多様な個性や価値観に触れ、コミュニケーション能力を養い、より良い人間性を育むためには学校規模の標準を踏まえた方が良いと感じる。したがって、基本となる学校規模を前提として配置等を検討してもらいたい。

しかしながら、新設校がどこに配置されるかによって通学の利便性が変わる。義務教育ではないが、オール青森で高校教育を考え、9割以上が高校に通学している現状を考慮すると、通学環境には配慮してもらいたい。例えば、様々な企業や自治体が連携し、自転車通学が困難になる冬期間だけでもスクールバスを運行したり、高額な通学費に対するある程度の補助を行ったりすることも考えられるのではないか。

○ ウのシミュレーションは地域の実情を踏まえてもやむを得ないものであると思う。中南地区は、他地区と比較すれば恵まれた環境であると思う。その中でも統合が必要というのは非常に心苦しいところではあるが、このシミュレーションが妥当だろう。

保護者としては、地域に高校があるということが心強い。青森県を支える人材を育てていくには、やはり幅広い高校を選択できる自由があって、自由に高校生活を過ごせる環境が必要だろう。

このため、今後、私立高等学校保護者会連合会や高等学校PTA連合会等が連携し、現状について把握した上で様々な方に発信できるメッセージづくりに取り組んでいきたい。

○ これからの方向性としてはウのシミュレーションが妥当かと思う。是非新しい学校を設置し特色を出すということに取り組んでももらいたい。

柏木農業高校の農業科と弘前実業高校の農業経営科は、同じ農業科であっても内容も目指している生徒像も違うことが分かった。したがって同学科というだけで統合ということにはならないのではないか。そこで何を目指し、何を学ばせていくのかということを検討する必要があるが、一方、個々に考えるだけでなく、全体を俯瞰しての考え方や理念をもって考えていくことも難しいが同時に必要だと思った。目の前の生徒数の減少などの課題に対応しているだけでは高校教育改革は進んでいけない。

15歳から18歳までの多感な生徒たちが、互いに協力し切磋琢磨し育ち合っていく環境づくりのためには、学習機会や体験活動、生徒のニーズが十分考慮されることが必要だと思ふ。

- 県立高校と私立高校について意見を述べたが、県立高校は県立高校として青森県の人財育成に大きな役割を果たしていくことが必要であり、今後も引き続き取り組まなければならない。

公教育の役割は学習機会の提供である。学習機会の提供には例えば、定時制課程の在り方、増加している発達障害のある生徒に対する在り方、アクティブ・ラーニングの在り方等が含まれる。このことを考えると、学級定員について普通科であっても青森県独自に1学級当たりの定員を35人にしてはどうか。

また、定員に満たない状況になっても、地域を考えると学級数を維持することも必要なのではないかと思ふ。

- 弘前南高校は、スーパーサイエンスハイスクール等の魅力的な教育活動を実施していることもあり、同校を希望する生徒も多い。弘前市内の普通科が少ないこともあるので、普通科については、これまで同様の割合で存続させてもらいたい。

- 1学級当たりの生徒数については、やはり考える必要がある。例えば、4学級（160人）から3学級（120人）に減じると一度に40人減ってしまう。このことも十分に考えてもらいたい。

先日、進路志望状況調査が公表されたが、弘前実業高校の家庭科学科の倍率が突出して高かった。倍率が高いのは、家庭科学科で学びたいという理由なのか、弘前実業高校に進学したいという理由なのか、子どもたちの本音をしっかり見極める必要があるだろう。

弘前南高校についてであるが、同校には弘前大学への進学を積極的に促す働きかけがあると聞いている。もし弘前南高校が統合した場合、弘前大学への進学を積極的に目指す県立高校はどこになるのか。それは黒石市内の統合校になるのかもしれない。県が子どもたちに期待している学力と現場が考えている学力が一致しているのか考えていく必要があるだろう。

進行役から、事務局に対して今回の地区意見交換会の内容を踏まえ、資料1-3を修正するよう指示があった。また、進行役が修正内容を確認の上、当地区における主な意見として県教育委員会教育長に報告することについて委員の了解を求めたところ、異議はなかった。

#### 4 高等学校教育改革推進室長謝辞

佐藤高等学校教育改革推進室長から、謝辞があった。

## 5 閉会